

救急搬送傷病者等の意識調査結果

Research on Mental state of Sick or Injured persons whom Ambulances took

北岡 開 造*

飯田 稔*

石川 高 満*

概 要

本研究は救急搬送傷病者・同乗した関係者及び対応した救急隊員にアンケート調査を実施し、傷病者等の心理状況を把握するために実施した。

主な結果は次のとおり。

- 1 通報から救急車が到着するまでの時間について、傷病者等は実際に要した時間よりも長く感じていることが認められた。
- 2 傷病者本人と関係者の意識に大きな差は認められなかった。
- 3 救急隊員が無意識に行っている行為が、傷病者にとってうれしく感じていることもあり、一方心を和らげるために行った行為でも、必ずしもうれしいと感じていないことが認められた。

We sent out questionnaires to sick or injured persons or fellow passengers and ambulance men who had taken them.

The result were as follows.

1. The persons waiting for ambulance felt that their waiting time had taken longer than the actual required time.
2. The difference in the mental states between sick or injured persons and fellow passengers were small.
3. The persons felt easy seeing the action that the ambulance men did unconsciously, but the actions to make patient feel easy by the ambulance men did not always make them pleased.

いて分析することで、より効率的な救急活動と救急資器材等の改良に反映させるものである。

1. 調査目的

平成元年の救急出場件数は昭和63年よりも約13,000件増加し、378,205件に達し、救急需要が増加している。このような状況下において、その救急事象に適切に対応し、救急処置を行い、安全かつ迅速に、傷病者を救急医療機関に搬送するにあたっては、傷病者・救急隊員の相互理解と信頼感に基づくことが大切であることから、双方の意識を把握することが極めて重要である。このため傷病者及び対応した救急隊員に、アンケート調査を実施して、傷病者の心理状況を把握し、救急活動及び救急資器材等が心理面に及ぼす影響等につ

2. 調査項目

- (1) 救急隊到着までの傷病者等の意識
- (2) 救急処置時の傷病者等の意識
- (3) 救急搬送中の傷病者等の意識
- (4) 救急隊員の印象
- (5) 救急隊員の意識

3. 調査対象者等

- (1) 調査期間
平成元年9月29日から
平成元年10月31日まで
- (2) 調査区域
東京消防庁管轄区域内

*第四研究室

(3) 調査対象救急隊

各方面1隊、ただし第5方面は3隊、合計10隊

第一方面	神田消防署
第二方面	大井消防署
第三方面	世田谷消防署
第四方面	杉並消防署
第五方面	小石川消防署 豊島消防署 板橋消防署
第六方面	上野消防署
第七方面	金町消防署
第八方面	立川消防署

(4) 調査対象者

調査対象救急隊（以下「救急隊」という。）が搬送した傷病者または同乗した関係者（以下「傷病者等」という。）及び対応した救急隊員。傷病者等の選定にあたっては年代別、職業別について均等配布できるように留意した。

(5) 調査方法

原則として各当番日を午前、午後、夜間(22時から翌朝6時まで)の3区分とし、各調査区分において救急隊が搬送した傷病者1名に対してアンケート用紙を配布し、返信用封筒を用いて回収した。同時にアンケートを配布した救急事象に対して救急隊員は救急隊員用アンケートを実施した。

4. 調査数

(1) 調査対象救急件数

500件

(2) 傷病者アンケート有効回答者数

337人（回答率 67.4%）

(3) 調査対象救急隊員

延べ1500人

（隊長・隊員・機関員各500人）

5. 集計方法

単純集計及びクロス集計

6. 標本構成

標本構成は次のとおり。

(1) 傷病者等回答者

表1 性別

	男性	女性	計
実数 (人)	148	189	337
比率 (%)	43.9	56.1	100.0

表2 年齢別

	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80以上	計
実数 (人)	15	50	53	73	64	50	17	10	337
比率 (%)	4.5	16.3	15.7	21.7	19.0	14.8	5.0	3.0	100

表3 職業別

	会社員	自営業	主婦	学生	公務員	その他	計
実数 (人)	122	35	98	21	27	34	337
比率 (%)	36.2	10.4	29.1	6.2	8.0	10.1	100.0

表4 傷病者との関係

	傷病者本人	関係者	計
実数 (人)	83	254	337
比率 (%)	24.6	75.4	100.0

表5 覚知時間別

	8～12	12～18	18～22	22～24	0～8	計
実数 (人)	89	104	31	38	75	337
比率 (%)	26.4	30.9	9.2	11.3	22.3	100.0

表6 初診時程度別

	重症以上	中等症	軽症	計
実数 (人)	29	143	165	337
比率 (%)	8.6	42.4	49.0	100.0

(2) 救急隊員

表7 年 齢 別

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	計
実 数 (人)	184	639	584	93	1,500
比 率 (%)	12.3	42.6	38.9	6.2	100.0

7. 分析結果及び考察

(1) 救急隊到着までの傷病者等の意識

ア 救急要請者

アンケート調査回答者337人について、救急要請のため「どなたが、『119番』しましたか」という質問に対する結果は表8に示すとおり、傷病者本人は15人、4.5%、同居人を含む家族は186人、55.2%、近所の人21人、6.2%、その他は115人、34.1%であった。

その他の回答者としては、会社の同僚、駅員等の身近にいた者であった。

表8 救急要請者

	傷病者本人	家族(同居人を含む)	近所の人	そ の 他	計
実 数 (人)	15	186	21	115	337
比 率 (%)	4.5	55.2	6.2	34.1	100.0

イ 通報から到達までの時間

救急隊が通報から現場到着までに要した実際の時間と傷病者の回答した時間とを比較した結果を表9に示す。実際の時間より短い、「-3分以上」の差を感じた者は20人、また「-2分以内」と感じた者は50人、実際と同じ時間と感じた者は45人、実際の時間よりも長い、「+2分以内」で感じた者は137人、さらに「+3分以上」の差があった者は85人であった。このことから、実際の時間よりも長く感じていた者は、短く感じていた者より多く、救急車を待っている者は実際の時間よりも長く感じていることが認められる。

表9 通報から到着までの時間(回答時間 実時間)

	実 際 の 時 間 より短く回答	実 際 の 時 間 と同じく回答	実 際 の 時 間 より長く回答	計
	-3分 以上	-2分 以内	+2分 以内	+3分 以上
実 数 (人)	20	50	137	85
比 率 (%)	5.9	14.8	40.7	25.2

Q 救急車が到着した時の気持ちについて、どう思いましたか

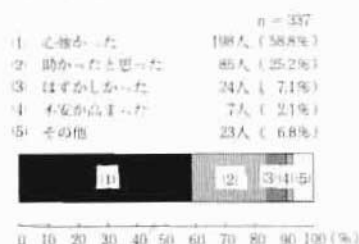


図1 到着時の気持ち

ウ 到着時の気持ち

救急隊到着時の気持ちについて、「救急車が到着した時の気持ちについて、どう思いましたか」という質問に対する結果を図1に示す。

「心強かった」と回答している者は、回答者の半数以上である198人、58.8%で、次に「助かった」と感じていた者は、85人、25.2%、「はずかしかった」と感じている者は24人、7.1%であった。

初診時程度と到着時の気持ちについて分析した結果を表10に示す。

表10 到着時の気持ち(程度別)

	心 強 か っ た	助 か っ た と 思 っ た	は ず か し か っ た	不 安 が 高 ま っ た	そ の 他	計
軽 症	87 (52.7)	45 (27.3)	16 (9.7)	6 (3.6)	11 (6.7)	165 (100.0)
中 等 症	93 (65.0)	34 (23.8)	5 (3.5)	1 (0.7)	10 (7.0)	143 (100.0)
重 症 以 上	18 (62.1)	6 (20.7)	3 (10.3)	0 (0.0)	2 (6.9)	29 (100.0)

()は%を示す。

心強かったと感じている者は、軽症者で87人、52.7%、中等症者で93人、65.0%、重症者で18人、62.1%であり重症者ほど心強かったと感じている。

また、助かったと感じている者は、軽症者45人、27.3%、中等症者で、34人、23.8%、重症者で6人、20.7%であり、軽症者の「助かった」という回答が若干多いが、いずれの傷病者等の回答も「心強かった」、「助かった」と感じている者がほとんどである。

エ サイレン音について

「今回の救急要請で、救急車のサイレンについて、どう感じましたか」という質問に対する結果を図2に示す。「鳴らして来てほしかった」と回答している者は、169人、50.2%、「どちらかという、鳴らさないで来てほしかった」と回答している者は、82人、24.3%であった。

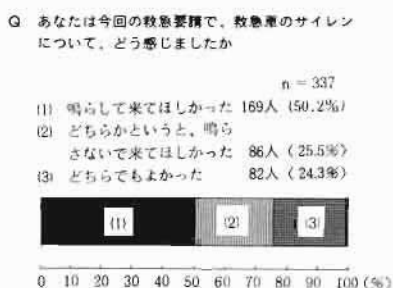


図2 サイレン音について

表11 サイレン音について (記入者別)

	鳴らして来て欲しかった	どちらかという、鳴らさないで来てほしかった	どちらでもよかった	計
傷病者本人	39 (47.0)	19 (22.9)	25 (30.1)	83 (100.0)
比付添人	130 (51.2)	67 (26.4)	57 (22.4)	254 (100.0)

()は%を示す。

アンケート記入の傷病者本人と関係者の回答に差があるのか調査するため記入者とサイレン音について分析した結果を表11に示す。

アンケートを記入した傷病者本人で、「鳴らして来て欲しかった」と回答している者は39人、47.0%、「どちらかという、鳴ら

さないで来てほしかった」者、19人、22.9%、「どちらでもよかった」者、25人、30.1%であるのに対して、関係者では、「鳴らして来て欲しかった」と回答している者は130人、51.2%、「どちらかという、鳴らさないで来てほしかった」者、67人、26.4%、「どちらでもよかった」者は57人、22.4%であり、傷病者本人と関係者との意識的な相違は見られない。

(2) 救急処置時の傷病者等の意識

ア 救急処置時の時間

救急隊が実際に要した時間と傷病者等の回答した時間とを比較した結果を表12に示す。

表12 現場出発までの時間 (回答時間—実時間)

	実際の時間より短い回答		実際の時間と同じ回答	実際の時間より長い回答		計
	-3分以上	-2分以内	±0分	+2分以内	+3分以上	
実数(人)	168	74	21	39	35	337
比率(%)	49.8	22.0	6.2	11.6	10.4	100.0

実際の時間より短い、「-3分以上」の差を感じた者は168人、また「-2分以内」と感じた者は74人、実際の時間より長い、「+2分以内」で感じた者は39人、「+3分以上」で感じた者は35人であった。

このことから実際の時間よりも長く感じていた者より短く感じていた者が多く、現場で救急隊員が救急処置を行っているのを見守りながら待っている気持ちは実際よりも短く感じていることが認められる。

Q 出発するまでの「救急隊員の行動」について n = 337

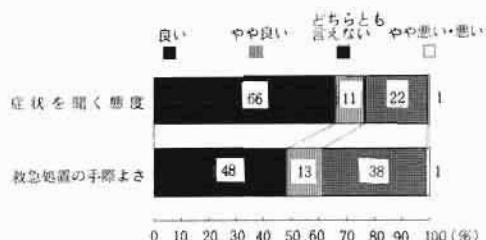


図3 救急隊の行動について

イ 救急隊員の行動

救急隊が到着してから、出発するまでの「救急隊の行動」について質問した結果を図3に示す。

症状を聞く態度について良いと回答している者は、222人、65.9%で、救急処置の手際よさについては、163人、48.4%の者が、良いと回答している。

ウ 救急処置

救急処置についてどう感じたかという質問について調査した結果を図4に示す。

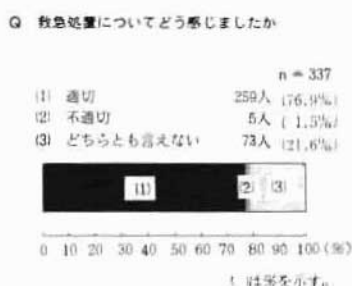


図4 救急処置について

「適切」と回答している者は、259人、76.9%であるのに対して、「不適切」と回答している者は、5人、1.5%であり、残りの73人、21.6%は「どちらとも言えない」と回答していて、ほとんどの者は適切であったと答えていることがうかがえる。

エ 傷病者への配慮

救急隊の傷病者への配慮について調査した結果を図5に示す。

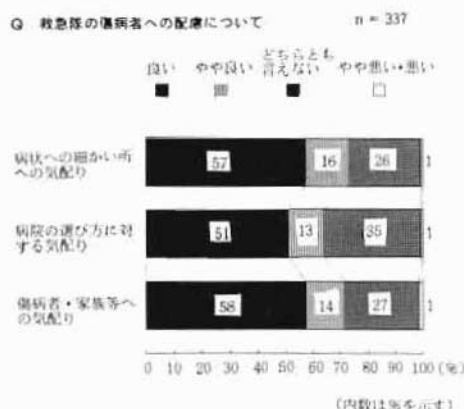


図5 傷病者への配慮

傷病者への配慮について「良い」と回答している者は、「病状への細かい所への気配り」では、193人、57.3%、「病院の選び方に対する気配り」では、172人、51.0%、「傷病者・家族等への気配り」では、194人、57.6%であり、「良い」と回答している者は、「病状への細かい所への気配り」、「傷病者・家族等への気配り」に比べ、「病院の選び方に対する気配り」と回答している者が若干少くなっているが、半数以上の者が良いと感じている。

「良い」と回答している者は、「病状への細かい所への気配り」、「傷病者・家族等への気配り」に比べ、「病院の選び方に対する気配り」と回答している者が若干少くなっているが、半数以上の者が良いと感じている。

(3) 救急搬送中の傷病者等の意識

ア 救急搬送中の時間

傷病者・関係者の感じた時間と実際に要した時間との差を分析した結果を表13に示す。

表13 病院到着までに要した時間差 (回答時間－実時間)

	-5分差以上	-4分差	0分差	+4分差	+5分差以上	合計
傷病者	6 (7.2)	14 (16.8)	13 (15.7)	37 (44.6)	13 (15.6)	83 (100.0)
関係者	13 (5.2)	45 (17.7)	33 (13.0)	109 (42.9)	54 (21.2)	254 (100.0)

()は%を示す。

ほとんどの者が4分前後(±4分)の誤差で、実際に要した時間と同じ感覚を持っているが、実際の時間よりも長く回答した者は、337人中213人、63.2%である。また、実際よりも5分以上早く病院に到着したと感じている者は、傷病者で6人、7.2%、関係者で13人、5.2%いるのに対して、実際よりも5分以上遅く到着したと感じている者は、傷病者で13人、15.6%、関係者で54人、21.2%いる。このことから、病院に到着するまで遅く感じている者が多く、さらに関係者の方が、傷病者よりもさらに遅いと感じていることがうかがえる。

さらに、初診時程度別に分析した結果を表14に示す。

表14 病院到着までに要した時間差 (程度別)

	-5分差以上	-4分差	0分差	+4分差	+5分差以上	合計
軽症	8 (4.8)	25 (15.2)	30 (18.2)	79 (47.9)	23 (13.9)	165 (100.0)
中等症	8 (5.6)	30 (21.0)	15 (10.5)	56 (39.1)	34 (23.8)	143 (100.0)
重症以上	3 (10.3)	4 (13.8)	1 (3.4)	11 (37.9)	10 (34.6)	29 (100.0)

()は%を示す。

程度別では、実際の時間との差が4分前後(±4分)の誤差で到着したと感じている者についてみると、軽傷者は134人、81.2%で、重傷以上は16人、55.1%で、軽傷者が多くなっており、また、重傷以上は5分以上遅く来たと感じている者は、10人、34.5%で、軽傷者は23人、13.9%となっていて、重症以上の方が多い。このことから重症者ほど、救急車が病院に到着するまでの時間が長く感じている傾向にあり、統計上の χ^2 検定の有意差判定で分析すると、有意差5%レベルで関連性が認められた。

以後、有意差の認められた場合は、「 $p < 0.05$ 」と示す。

イ 救急車に対する意識

救急車のことについての質問に対する調査結果を図6に示す。

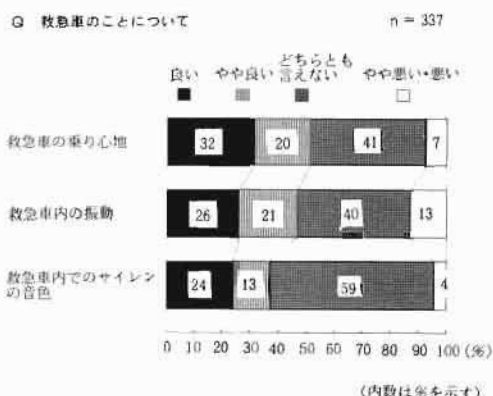


図6 救急車について(その1)

「救急車の乗り心地」で「良い」と回答した者は106人、31.5%、「やや悪い」、「悪い」と回答した者は24人、7.1%、「救急車内の振動」で、「良い」と回答した者は88人、26.1%、「やや悪い」、「悪い」と回答した者は43人、12.8%、「救急車内でのサイレンの音色」で、「良い」と回答した者は81人、24.0%、「やや悪い」、「悪い」と回答した者は14人、4.0%であった。

また、図7に示すように「救急車内でのサイレンの大きさ」については、「大きい」、「やや大きい」と感じた者は、94人、27.8%で、弊害を感じる旨の回答があった。

ウ 搬送された病院について

搬送された病院について質問した結果を

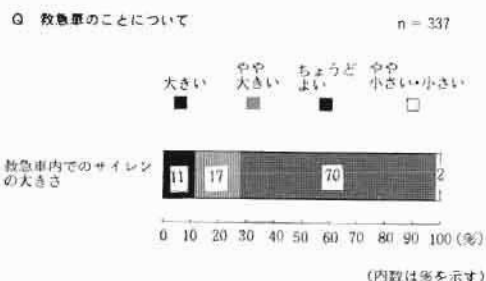


図7 救急車について(その2)

Q 希望どおり(思ったとおり)の病院に運んでもらいましたか

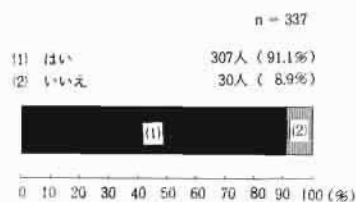


図8 病院について

図8に示す。運ばれた病院について、「希望どおり(思ったとおり)の病院に運んでもらいましたか」という質問に対して、307人、91.1%が「はい」と回答していて、「いいえ」と回答した者は、30人、8.9%であり、ほとんどの者が、希望どおりの病院に運んでもらったと感じている。

エ 搬送中の走行状況

搬送中の走行について質問した結果を図9に示す。

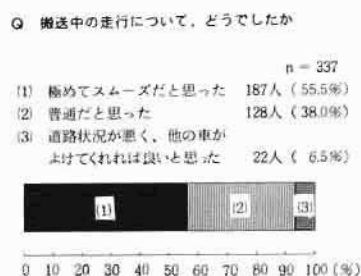


図9 搬送中の走行状況

搬送中について、「極めてスムーズだと思った」者は、187人、55.5%、「普通だと思った」者は、128人、38.0%、「道路状況が悪く、他の車がよけてくれば良いと思った」者は、22人、6.5%であった。

(4) 救急隊員の印象

ア 救急隊員の行った行為

救急隊員の行った行為について、「うれしかったことには○」を「物足りなかったことには×」をつけて下さいという質問に対して調査した結果を図10に示す。

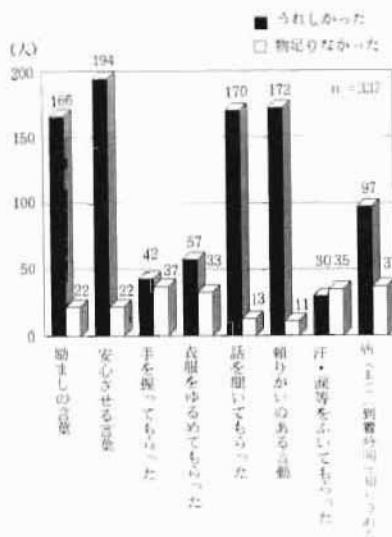


図10 救急隊員の行った行為の印象

「うれしかった」と回答している者は、「励ましの言葉」については166人、「安心させる言葉」については194人、「話を聞いてもらった」については170人、「頼りがいのある言動」については172人であった。また、「物足りなかった」と回答している者は「手を握ってもらった」と「到着時間を知らされた」が37人、「汗・涙等をふいてもらった」が35人であった。

「励ましの言葉」、「安心させる言葉」、「話を聞いてもらった」、「頼りがいのある言動」でうれしかったと感じている割合が高くなっている。また、物足りなかったと回答している項目では、「汗・涙等をふいてもらった」が多く認められ、続いて、「手を握ってもらった」という項目である。

以上から、傷病者等は「励ましの言葉」や「安心させる言葉」をかけられ、「話を聞いてもらい」、また、「頼りがいのある言動」で接せられるとうれしく感じやすく、「手を

握られ」、「衣服をゆるめてもらう」、「汗・涙等をふいてもらう」ことに物足りなく感じていることがうかがえる。

救急隊員が行った励ましの言葉、安心させる言葉、手を握ってもらった、衣服をゆるめてもらった、話をきいてもらった、頼りがいのある言動、汗・涙等をふいてもらった、到着時間を知らされたという各行為について、うれしかったと回答している者について分析する。

(7) 職業別

各行為に対してうれしかったと回答している者を表3の各職業の人数の割合で分析した結果を図11に示す。

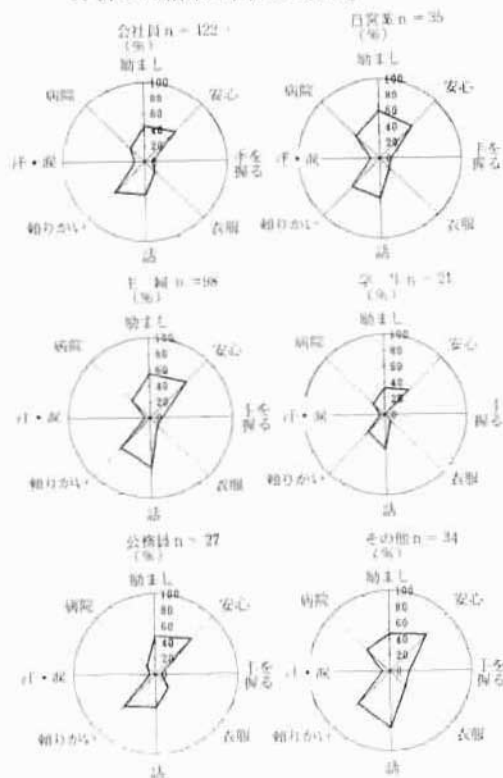


図11 「うれしかったこと」(職業別)

ほとんど同じパターンを示しているが、学生は全体的にパターンが小さくなっていて、うれしかったという感じは他の職業の者より少ない。

細部についてみると、「励ましの言葉」については自営業と主婦が高い割合でうれしかったと感じていて、「安心させる言葉」、「頼りがいのある言動」については

全般的に高い割合であるが、学生は低い傾向にあり、「手を握ってもらった」、「衣服をゆるめてもらった」、「汗・涙等をふいてもらった」は全般的に低い傾向がみられる。また、「話をきいてもらった」については、主婦が高く、「到着時間を知らされた」という項目でうれしく感じているのは自営業が高くなっていて、主婦は話を聞いてもらうとうれしいと感じていることがうかがえる。

(イ) 初診時程度別

各行為に対してうれしかったと回答している者を表6初診時程度別の人数の割合で分析した結果を図12に示す。

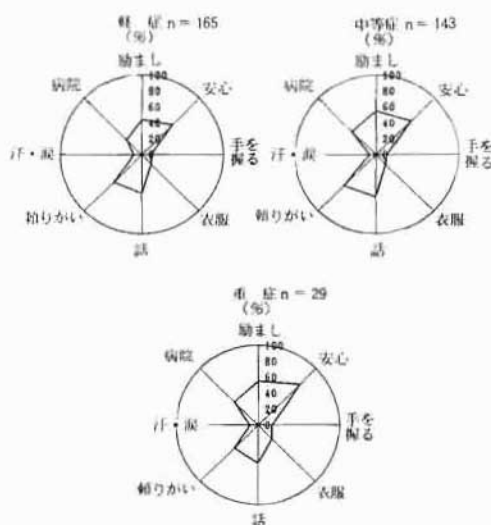


図12 「うれしかったこと」(初診時程度別)

職業別の場合と同じく、ほとんど同じパターンを示しているが、重症者は軽症者や中等症者よりもやや大きなパターンを示していて、重症者の方がうれしかったという感じをもっていると考えられる。

細部についてみると、「励ましの言葉」、「話をきいてもらった」、「頼りがいのある言動」については、50%前後でうれしかったと感じていて、やや中等症が

高い割合を示している。また、「手を握ってもらった」、「衣服をゆるめてもらった」、「汗・涙等をふいてもらった」は全般的に低い傾向がみられるが、やや重症で高くなっている。「安心させる言葉」、「到着時間を知らされた」という行為は軽傷者よりも重症者の方が、うれしかったと感じている割合が高くなっている。

また、救急隊員が行った励ましの言葉等について、うれしかったと回答している者を初診時程度別にさらに詳しく分析した結果を表15に示す。重症以上の例数が少ないため、中等症以上としてまとめると、「汗・涙等をふいてもらった」という項目以外の「励ましの言葉」等の項目で、傷病者の初診時程度と関係があり、軽傷者よりも中等症以上の方がうれしかったと感じている傾向にあることが認められる。

表15 救急隊員の行った行為と初診時程度別の関連性 (うれしかったと回答している者)

	軽症 (人)	中等症以上 (人)
励ましの言葉	72	94
安心させる言葉	87	107
手を握ってもらった	18	24
衣服をゆるめてもらった	26	31
話を聞いてもらった	80	90
頼りがいのある言葉	81	91
汗・涙等をふいてもらった	16	14
病院到着までの時間を知らされた	45	52

「励ましの言葉」等の救急隊員の行った行為について性別で分析した結果、有意差の認められた「励ましの言葉」についてみる。(P<0.05)

性別で分析した、「励ましの言葉」をかけられ、うれしく感じたかという質問に対する結果を表16に示す。

女性で「励ましの言葉」をかけられ、うれしく感じた者は、61人、79.2%、物足りなかった者は、16人、20.8%である

のに対し、男性では、うれしく感じた者は、105人、94.6%で、物足りなかった者は、6人、5.4%であり、女性にはもっと励ましの言葉をかけてあげた方が良いことが認められる。

表16 性別による「励ましの言葉」の受け方

	「励ましの言葉」		合 計
	うれしかった	物足りなかった	
女 性	61 (79.2)	16 (20.8)	77 (100.0)
男 性	105 (94.6)	6 (5.4)	111 (100.0)

()は%を示す。

イ 全体の印象

救急隊員の印象について質問した結果を図13に示す。

Q 救急隊員の全体的な印象をお聞かせ下さい。



図13 全体の印象

「極めて満足」と回答した者は、172人、51.0%、「おおむね満足」と回答した者は、134人、39.8%、「普通」は22人、6.5%、「やや不満」は、3人、0.9%、「不満」と回答した者は、6人、1.8%であった。

ウ 救急隊員の行為

救護にあたった救急隊員について、感じた結果を図14に示す。

救急隊員が行った「励ましの言葉」、「安心させる言葉」、「手を握ってもらった」、「衣服をゆるめてもらった」、「話をきいてもらった」、「頼りがいのある言動」、「汗・涙等をふいてもらった」、「到着時間を知らされた」という各行為について、「うれしかった」または「物足りなかった」と回答している者と救護にあたった救急隊員の印象について関連性をみるため、統計上の χ^2 検定の有意差判定で分析した結果を表17に示す。

Q 救護にあたった救急隊員について、該当する全てに○を付けて下さい。

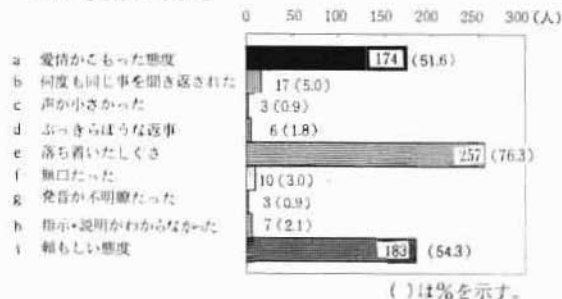


図14 救護にあたった隊員の印象

表17 救急隊員の行った行為と救急隊員の印象

	愛情のこもった態度	落ち着いたしぐさ	頼もしい態度
励ましの言葉	0.000	0.221	0.024
安心させる言葉	0.000	0.965	0.303
手を握ってもらった	0.000	0.06	0.021
衣服をゆるめてもらった	0.000	0.101	0.003
話を聞いてもらった	0.000	0.356	0.306
頼りがいのある言葉	0.002	0.526	0.012
汗・涙等をふいてもらった	0.418	0.183	0.112
病院到着までの時間を知らされた	0.000	0.041	0.093

各項目のほとんどにわたり、傷病者等は「愛情のこもった態度」と関連性が認められ、「落ち着いたしぐさ」では、「病院到着までの時間を知らされた」という項目が強く関連性が認められ、また、「頼もしい態度」では、「衣服をゆるめてもらった」項目に強い関連性が認められる。

救護にあたった救急隊員について、該当するものを選択する質問に対して、「愛情がこもった態度」と「通報から到着までの時間」について分析した結果を表18に示す。

通報してから救急隊が現場に到着するまでの気持ちとして、「とても早く来たと思った」と回答している者で、「愛情がこもった態度」を感じている者は、88人、57.1%、感じていない者は、66人、42.9%であるのに対して、「とても遅く感じた」者で、「愛情のこもった態度」を感じている者は、7人、29.2%で、また、感じていない者は、

17人、70.8%である。このことから、通報してから救急隊が現場に到着するまでの時間が早い方が救急隊に良い印象を持っている傾向が認められる。(P<0.05)

表18 「愛情がこもった態度」と「通報から到着までの時間」

	愛情がこもった態度		合 計
	該 当	非 該 当	
とても早く来たと思っ た	88 (57.1)	66 (42.9)	154 (100.0)
この程度だろうと思 う時間内に来た	79 (49.7)	80 (50.3)	159 (100.0)
とても遅く感じた	7 (29.2)	17 (70.8)	24 (100.0)

()は%を示す

エ 救急活動への関心度

ふだんから救急活動に関心があったかについて調査した結果を図15に示す。

Q ふだんから救急活動に関心をお持ちでしたか。

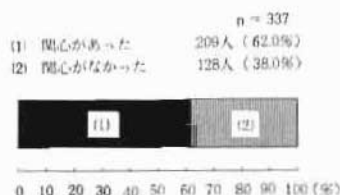


図15 救急活動への関心度

「ふだんから救急活動に関心があった」と回答している者は、209人、62.0%で、「関心がなかった」と回答している者は、128人、38.0%であった。

救急活動への関心と職業別との関連性をみた結果を表19に示す。

表19 救急活動への関心度 (職業別)

	関心があった	関心がなかった	合 計
会 社 員	71(58.2)	51(42.8)	122(100)
自 営 業	25(71.4)	10(28.6)	35(100)
主 婦	61(62.2)	37(37.8)	98(100)
学 生	7(33.3)	14(66.7)	21(100)
公 務 員	20(74.1)	7(25.9)	27(100)
そ の 他	25(73.5)	9(26.5)	34(100)

()は%を示す。

自営業では、関心のあった者は25人、71.4%であり、なかった者は10人、28.6%、主婦で関心のあった者は、61人、62.2%、なかった者は37人、37.8%であった。また、学生で関心のあった者は、7人、33.3%であるのに対して、なかった者は66.7%である。

さらに公務員で関心のあった者は、20人、74.1%、なかった者7人、25.9%であった。このことから、自営業、主婦、公務員に救急活動へ関心が高く、また学生では関心が薄いという傾向が認められる。(P<0.05)

(5) 救急隊員の意識

ア 搬送中に行った行為

救急隊員の隊長、隊員に対して、搬送中、傷病者の心を和らげるために行った行為について調査した結果を図16に示す。

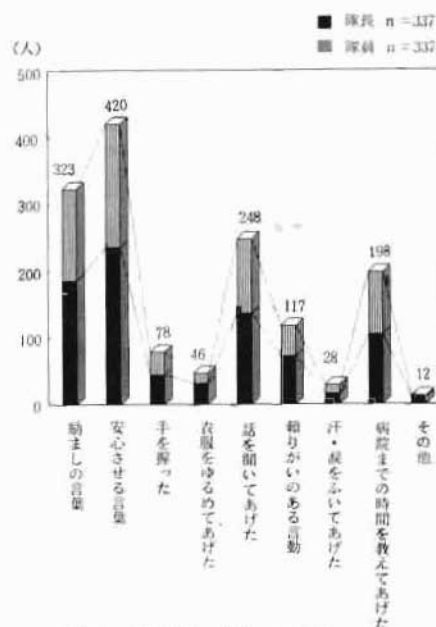


図16 搬送中に行った行為

救急隊が傷病者に対して心を和らげるために行った行為を傷病者等はどうに受け止めていたかについて分析するため、傷病者の回答と比較した結果を表20に示す。

「励ましの言葉」をかけた者は、隊長で186人、隊員で137人の回答があり、傷病者等で「励ましの言葉」をかけてもらい「うれしかった」と回答している者は166人いた。

表20 行為の意識に対する比較（和らげるため）

	救急隊員側		傷病者側
	隊長	隊員	
励ましの言葉	186	137	166
安心させる言葉	236	184	194
汗・涙等をふいてあげた	15	13	30
衣服をゆるめてあげた	31	15	57
頼りがいのある言動	72	45	172
病院までの時間を教えた	104	94	97

n = 337

ここで、傷病者の意識と救急隊員の意識が一致しているかをみるために、傷病者が「励ましの言葉」をかけてもらい「うれしかった」と回答している者で、同じく隊長も心を和らげるために「励ましの言葉」を行ったと回答している者をみると、隊長で104人、隊員で69人であった。

同じように傷病者の回答で、「安心させる言葉」をかけられて「うれしかった」と回答している者は、194人いるが、隊長と意識が一致している者は138人、隊員と意識が一致している者は114人である。

このことから、救急隊員は無意識に行っていることがむしろ傷病者にとってはうれしいことであることがわかる。

一方、「汗・涙をふいてあげた」行為では、傷病者の回答数は30人であるのに対して、隊長で15人、隊員で13人である。

また、「衣服をゆるめてあげた」行為で傷病者がうれしかったと回答している者は、57人であるが、隊長で31人、隊員で15人であった。さらに、頼りがいのある言動については救急隊員の回答数が傷病者の回答数の半分以下である。

これらのことから、汗・涙をふいてあげた、衣服をゆるめてあげた、頼りがいのある言動という行為は、特に心を和らげるために行ったという自覚がなく救急隊員が

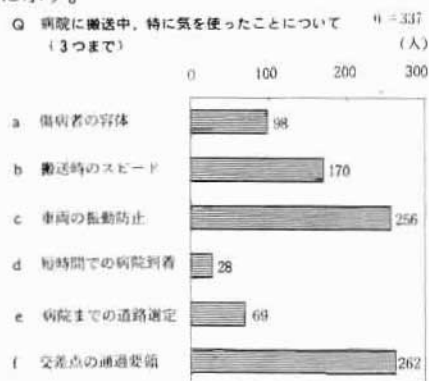
行っていると考えられる。

また、傷病者の心を和らげるために、救急隊員が病院までの時間を教えてあげたと回答している者は、隊長で104人、隊員で94人であり、さらに傷病者でうれしかったと感じた者は97人でほぼ同数である。

ここで、表において、隊長の回答数が隊員よりも多いのは、傷病者に接している時間が長いためと考えられる。

イ 機関員の意識

機関員延べ337人に対して搬送中特に気を使ったことについて調査した結果を図17に示す。



※ 運転中、特に注意をした項目の上位3つを選択し、回答させたもの。

図17 搬送中の注意事項

ここで、特に3つ以内と限定して選択させたため、全ての項目に注意しながら搬送している救急隊は、選定に苦労したと思われる。

「交差点の通過要領」と回答した者が262人、「車両の振動防止」が256人、「搬送時のスピード」が170人、「傷病者の容体」が98人、「交差点の通過要領」、「車両の振動防止」に特に注意して運転していることがうかがえる。

ウ 道路状況

傷病者の走行中の意識については図14に示したとおりであるが、同じく搬送中の道路状況を救急隊の機関員に対して質問した結果を図18に示す。

「極めてスムーズ」であったと回答している者は、111人、32.9%、「普通」と回答

Q 搬送中の道路状況について



図18 搬送中の道路状況

している者は、198人、58.8%、「悪い」と回答している者は、28人、8.3%であり、比較的スムーズに搬送されたことがうかがえる。

8. ま と め

(1) 救急隊到着までの傷病者等の意識

ア 通報から到着までの時間について、本調査結果では、5分16秒であるが、通報から救急隊が現場到着するまで、65.9%の者が実際の時間よりも長く感じていることが認められた。

イ 救急隊到着時の気持ちについては、「心強かった」と回答している者は半数以上の198人、58.8%であり、女性が特に「心強かった」と感じている傾向が認められた。

ウ 救急車のサイレンについて、「どちらかというと、鳴らさないで来てほしかった」と回答している者は、約4人に一人いた。

エ 関係者も傷病者と同じ意識状況下にあると推測されることから、今後の救急活動では、傷病者の対応以外に、関係者を含めた対応に留意しなければならないと考える。

(2) 救急処置時の傷病者等の意識

ア 救急処置時の時間は、実際よりも早く感じていることが認められ、現場で救急隊員が救急処置を行っているのを見守りながら待っている気持ちは、安堵感等により実際よりも短く感じていることが認められた。

イ 救急隊員の行動は、救急隊が到着してから、出発までの「救急隊の行動」については、全般的に良い評価を受けているが、特に対応態度については傷病者等の70%以上が良いと回答している。

ウ 救急処置については337人中259人、

68.7%の者が適切であったと回答している。

エ 傷病者への配慮は、「病状への細かい所への気配り」、「傷病者・家族等への気配り」という救急隊の傷病者への配慮については、ほとんどの者が良いと回答している。

(3) 救急搬送中の傷病者等の意識

ア 病院に到着するまで遅く感じている者が多く、さらに関係者の方が、傷病者よりも遅いと感じていることがうかがえる。このことから、関係者にも注意をはらう必要があると考えられる。

また、初診時程度別に分析した結果、重症者ほど、救急車が病院に到着するまでの時間が長く感じている傾向にあることが認められる。

イ 運ばれた病院については、307人、91.1%の者が、希望どおりの病院に運んでもらったと感じている。

(4) 救急隊員の印象

ア 救急隊員の行った行為についてみると、傷病者等は「励ましの言葉」や「安心させる言葉」をかけられ、「話を聞いてもらい」、また、「頼りがいのある言動」で接せられるとうれしく感じ、「手を握られ」、「衣服をゆるめてもらう」、「汗・涙をふいてもらう」ことに物足りなく感じていることがうかがえる。

さらに女性にはもっと励ましの言葉をかけてあげたほうが良いことが認められた。

(イ) 各行為について、職業別にみると、主婦は話しかけられるとうれしいと感じていることがうかがえる。

また、学生はうれしかったという感じは他の職業の者より少なくなっていた。

(イ) 年齢別にみると、各年齢の人数の割合で分析した結果、高齢者はうれしかったという感じが強く認められた。

(イ) 初診時程度別にみると、「安心させる言葉」、「到着時間を知らされた」という行為は軽傷者よりも重症者の方が、うれしかったと感じている割合が高くなっている。

(イ) 各行為について、昼間と夜間では、「言葉をかけること」、「話を聞いてあげるこ

と」や「手を握る」という動作で表す行為に違いがあり、夜間では話を聞いてあげるとよろこばれている。

イ 救急隊の印象については、ほとんどの者が満足と回答しており、傷病者等の意見として、感謝の気持ちが多く寄せられている。

ウ 通報してから救急隊が現場に到着するまでの時間が早い方が救急隊に良い印象を持っている傾向が認められ、早く到着することが、その後の救急活動に与える意識面で良い影響が現れている。

エ 救急活動への関心については、「ふだんから救急活動に関心があった」と回答している者は62.0%であり、自営業、主婦、公務員に救急活動への関心が高く、また、学生では関心が薄いという傾向が認められることから、学生層への救急の普及活動が、今後さらに必要であると考えられる。

(5) 救急隊員の意識

ア 搬送中の行為については、救急隊員が無意識に行っていることがむしろ傷病者にとってはうれしいことであることが認められた。

また、「汗・涙をふいてあげた」、「衣服をゆるめてあげた」、「頼りがいのある言動」という行為は、特に心を和らげるために行ったという自覚がなく救急隊員が行って

いると考えられる。

これらのことから、傷病者の様態観察と同時に、安心感を与える方策について慣れしておく必要がある。

イ 機関員が搬送中、特に気を使ったことは、「交差点の通過要領」、「車両の振動防止」、「搬送時のスピード」、「傷病者の容体」への項目が上位を占めていて、緊急車としての安全運行に配慮していることが認められた。

9. お わ り に

救急隊員は複雑化する疾病事象に対応するため、救急技術を駆使し、救急現場に臨んでいるが、同時に都民の目が厳しい救急活動現場では、規律ある行動をとらなくてはならない。

このように救急隊員は人との対応も処理しなくてはならず、今回傷病者の意識を調査したものであり、調査結果のうち、傷病者の対応以外に、関係者も傷病者と同じ意識状況下にあると推測されることから、今後の救急活動では、関係者を含めた対応に留意しなければならないと考える。

【参考文献】

- (1) 日本人の意識150：読売新聞社世論調査室編
昭和57年1月25日 株式会社至誠堂
- (2) 救急活動の実態：平成元年東京消防庁救急部